

平成 23 年 4 月 18 日現在

機関番号：15201
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19530622
 研究課題名（和文）子どもの脆弱性と不屈性—相反する心理性を育む地域という土壌の臨床心理学的解析—
 研究課題名（英文）Vulnerability and resilience in children—The psychological climate where contradictory mentality develops.
 研究代表者
 肥後 功一（HIGO KOICHI）
 島根大学・教育学部・教授
 研究者番号：00183575

研究成果の概要（和文）：濃密な人間関係、豊かな自然環境との交流、伝統文化や行事と緊密に結びついた生活様式など、かつては地域社会の子どもの強さの形成に寄与していたと考えられる要因や構造が、いまなぜ機能しなくなり、人口の少ない地域社会の子どもの脆弱性につながっているのかの解明に取り組んだ。その結果「地域物語構造」「地域親子関係構造」「地域自己構造」の3つの視点から臨床心理学的地域支援を構想することの重要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：Dense interpersonal relationships, exchange with rich natural environment, lifestyle intimately related to traditional culture and event, etc. These are thought to be factors or structures that contributed to develop children's tolerance or resilience in our regional society before. Why do these seem not to work today? This study intended to clarify the clinical factors connected with the vulnerability of the children of the regional society with few population. The importance of planning the psychological support from three viewpoints—"Regional story structure", "Regional parent and child relationship structure", and "Regional self structure" was suggested as a result..

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：教育臨床心理学 発達臨床心理学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：心理的脆さ(脆弱性)、不屈性(自己回復力)、地域親子関係構造、地域物語構造、地域自己構造、臨床心理学的地域支援

1. 研究開始当初の背景

山陰地域は、ここ数年、目だって不登校の発生率が高い。同じ島根県内を比較してみる

とき、市街地・中心部に比べて、いわゆる僻地・中山間地域・島嶼部などの不登校率が低いとは言えず、むしろ高めに出てくる傾向さ

え見られる。さらにこうした地域での問題を事後に分析してみると、その兆候自体はかなり小さい頃から見られ、そして一旦発生したら長期にわたって継続しがち…というケースが少なからず見られる。

こうした心理臨床的課題は、いわゆる不登校だけではなく、いじめに代表されるような不適切で過剰な攻撃性の発揮、またその逆に特段のエピソードが無いのに漠然とした周囲への被害感や不信感をもち不適応に陥る事例…など、多くの場合、背景に何らかの「傷つきやすさ、脆さ (vulnerability)」の問題を孕んでいるという心理臨床的仮説をもつことができる。

このような「傷つきやすさ、脆さ」の主要因として心理臨床は、子ども自身の資質 (気質など遺伝的な傾向性を含む) 及び親のかかわり方 (感受性や反応性などに代表される育児に関わる認知-行動的スキルの問題)、さらには両者の関係的要因 (特に母-子関係、父-子関係、あるいは夫婦関係) を仮定し、それらに何らかの改善・修復・再構造化を加えることを目的として、臨床心理学的介入が企図されてきたと言えよう。

しかしながら私たち研究代表者及び研究分担者は、地域での心理臨床相談を通じて、これらの要因を捉える際、より大きな背景要因への視点をもつことが重要ではないかと感じてきた。それは「地域という心理臨床的土壌」の意味を捉えるということである。

2. 研究の目的

「地域」が確かな心理的リアリティをもって存在するこの山陰地方で、いまなぜ多くの心理臨床的問題が起きつつあるのか? 「都会の子どもはひ弱で、田舎の子どもは逞しい」という通俗的な見方がもはやほとんど当たらないことは言うまでもないが、それにしてもかつては不屈性 (toughness) あるいは自己回復力 (resilience) の育ちに繋がったであろう「地域」の力が、いまなぜ逆に「脆弱性 (vulnerability)」に繋がってしまうのか?

その解明を背景にしつつ、臨床心理学的地域支援の在り方を探る事が本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究は次の3つの部分から成っている。

(1) 「地域物語構造」の解析 (研究分担者: 岩宮恵子が担当)

「地域」には人々の語りを独自の民俗的「文脈」によって縛りコントロールしている物語構造が在り、それが目に見えない形で地域-学校-家庭を良くも悪くも繋ぐものとなって機能しているとする仮説を検証しながら、物語構造の「紡ぎ」を変化させるものとしての

心理臨床の可能性について解明する。

(2) 「地域親子関係構造」の解析 (研究分担者: 三宅理子が担当)

「地域」の構造を受けた家族の中核部である「親-子」関係について、3世代同居という家族形態が残存する一方で世代間あるいは家族構成員同士の関係は希薄化しているという現状の中で、家族間の心的葛藤を捉えることにより、「地域」の問題が「親子」にどのような形で反映されていくかを解明する。

(3) 「地域自己構造」の解析 (研究代表者: 肥後功一が担当)

地域-親子の構造を受けた「自己」の問題として発生する「脆弱性」と「不屈性」(自己回復力)の両概念について、乳幼児の心的構造の中にどのように生成するのかを、他の側面の発達との関係の中で検討する。

以上の(1)-(3)を統合する形で、臨床心理学的地域支援のポイントとなる事項を抽出した。

4. 研究成果

(1) 「地域物語構造」の解析から

“地域”に根ざした共同体での人間関係が生きていると思われる場所では、独自の民俗的“文脈”によって行動を縛ったり制御したりしている物語構造のようなものがあるのではないかという仮説のもと、研究分担者がスクールカウンセラーとして経験した相談事例及びコンサルテーション事例について、都市部の相談事例との対比等を含みつつ分析・考察を試みた。

①心理的衝撃を「物語」によって抱え安定しようとする地域の心性-中学生の事例と「遠野物語」にみられる地域物語構造の機能—

2009年、島根県中部の町で女子大生失踪事件が起きた。その後、切断された遺体が県境の山中で発見され、事件は全国的に大きく報道された。ところが当該地域の多くの中学生は、ひと月も経たないうちに事件について話題にしなくなった。周囲の大人や家族の守りを感じながら不安を収めていった、あるいはまた感情を解離して過ごそうとした、など解釈はさまざまに可能だが、それにしても土地の中学生たちがこの重大事件についてあまりにも短期間で忘れ去ったような状態を示すことは、教育・臨床現場では話題になった。一方で事件を「神隠し」ではないかと確信を持って語り、日常を超えた存在を想定した視点で真剣に考えている中学生が複数事例あった。遺体発見後も神隠しのイメージは動き続けていた。この不可解な事件を心に納めていくために神隠しというイメージがどうしても必要だった子どもたちがいるということである。担任に提出する生活ノートに、女子大生が行方不明になったショッピングセ

ンターの名称を使い、その場所から不思議な世界に迷い込むことになった少女たちの話を創作して書いた事例もあった。

土地に生き続ける人々が、その日常を大きく脅かす出来事に直面したとき、それを深く心に納めてなおかつ日常生活を営んでいくためには、その共同体の内で語り継がれるなにかの「物語」—すなわち異界とその固有の土地の具体的な日常とを結びつけるものとして語られる物語が必要になってくる。

「遠野物語」のように、現実には即した物語、固有名詞を持った、まさに目の前で起きた物語として語られる「地域物語構造」がこの地域にはまだ潜在していることを、大きな事件を通じて垣間みることができたように思う。

② 異界につながる「物語構造」を現代の子どもはどのように構築しているか—ネットの問題から—

思春期には、日常的な理とはまったく異なった超越的な世界が自分の「生」とどう関係しているのかを模索していくプロセスが始まる。自分は何者なのか、なぜ生まれてきたのか、なぜこの姿と能力で生きていかななくてはならないのか…といった問いの根本にあるのは、この模索である。

こうした超越的な世界は、従来、イメージによって探索され繋がるものであったが、最近では、さほどイメージの力を必要としなくても、ネットという異次元において手軽に手に入るようになってしまった。それはまったく超越とは言えないものであるが、現実とは違った世界という意味で、思春期の子どもの心を強烈に惹きつけるものとなっている。

近年の思春期・青年期の面接事例では、ネットでの体験と現実の体験との間に、まったく境界を感じていない人が増えている。一生会うことがなくてもネットでの恋人のことしか考えられない（それがアニメのキャラのこともある）というような言葉を面接室で聞くと、「遠野物語」における異類婚を連想させられる。ネットの世界だけの恋愛（「ネット異類婚」としておく）に意味を感じている人には、ネットでの出会いを現実の恋愛関係に利用する（「直結」と呼ばれる）という発想はない。

広大な情報と無数の人間関係へとネットを通じていつでも家からアクセスできるようになった今日、心理療法の現場に持ち込まれる問題も多様化し、その治療プロセスも変化してきている。こうした相談事例において、ネット上の話題などを具体的に語ってもらうことが、ネットの世界と現実のリアルな世界を結びつけていくための架け橋になることが、さまざまな事例から検証された。出来事を面接室で「物語る」ことによってネット（異界）とリアル（日常）をつなぐ物語を生成していくことは、変化を促す力になるので

ある。

③ 現代の思春期の「異界」との関わりに一物語生成以前の問題として—

中学生男子Aの事例。特に理由もはっきりしないまま保健室登校が始まったが、本人には特に困っているという感覚がなく、まったく主訴について語らない。主訴に関係するであろう友人関係や教室での居心地のようなことを聞いても「いや、別に。フツーです」と繰り返すだけでまったく深まらないが、話をするのが嫌な様子もない。こちらから具体的な話題を振ると嬉しそうに応じるが、話がひとつ終わると、次は何を聞いてくれるのかな？と頼るようにこちらに目を向けてくる。こうした事例自体は全国的に増加しているが、この事例Aについては、改善に際して地域的な特徴と考えるといいものが見られた。

ある日Aは町はずれの神社にある大きな岩がすごく興味深かったという話題を面接室で語った。その後、担任教員からの情報により、その岩の由来を記した説明板を強く蹴って壊そうとしていたということがわかった。Aにとって岩にまつわる外来の説明は不要であり、自分の大切なイメージを阻害する邪魔なものとして認識されていたのであろう。「ただの名前のない岩だったらよかったのに」という言葉も語られた。日常的な位置づけを持たない圧倒的な無名性は、超越に通じていく。そのようなものとの出会いを彼は求めているものと解釈された。この岩をめぐる一連のプロセスの後、Aはクラスでの違和感などを意識化して語るができるようになり、その後、適応へと向かっていった。

日常性を超えた力の存在を知ること、その力の存在を知ったうえで、もう一度、日常に着地していくこと…こうした思春期のテーマを、Aのような形で表わす事例が地域には存在する。神社や何らかの神性を感じさせる岩などに「もの（魂）」を感じるといったことは、なかなか都市部では見られない。しかしこれは物語構築以前の「圧倒性」の問題として次元を異にする問題かもしれない。

④現代の思春期の問題と共同体意識

教員からカウンセリングを勧められると、何の葛藤もなく、相談室にやって来る子も増えてきている。相談に行くなんて絶対に嫌だと「否定」することで自分の内面を意識することもない。そして相談に来て、拒否的ではないのに自分から話すことはない。また、その時に高まった感情を自分のなかで抱えておけないため、吐露する場所がほしいだけで、それを「悩み」や「苦しみ」として自分のなかで捉え直して、他者に話すという発想に至らない子も増えている。

10年ほど前までは、不登校の事例などに、対人恐怖が多く見られていた。近所の人に見られるのが嫌だとか、クラスに入るのが怖い

という訴えが多かったが、最近はそのような訴えが非常に少なくなっている。参入すべき共同体のつながりが薄くなっているため、個人レベルで受け入れられるか受け入れられないかという問題がクローズアップされ、「場」に対して受け入れられるかどうかという恐怖を訴える子は減ってきている。これは都市部に特有というわけではなく、地方の事例と比較しても、そこにほとんど差は見られなかった。

またこのように葛藤を内面的に抱えることができないという事例だけでなく、徹底的に他者との葛藤場面を避けるために、学校での個人的な友人関係の社交に膨大なエネルギーを費やす現象も見られる。「スクールカースト」のようにして階級による棲み分けが行われていたり、「友だち解散式」のように、まるで仕事仲間を募ってその学年を乗り切り、その学年が終わったら友だち関係を解散するというような事象が見られる。これも他の地域の教員への調査研究から、各地でも同様に見られる傾向であることがわかった。

(2)「地域親子関係構造」の解析から

地域親子関係構造を検討するため、主として相談事例から得られたエピソードの質的分析を行った。その結果、次の点が地域親子関係構造の特色として抽出された。

①祖父母世代から孫世代への“まなざし”

子どもが何らかの不適応状態を呈して相談室を訪れるケースについて、母親から家族関係について聴取すると、三世代同居世帯において世代間（祖父母の代と父母の代）に子育て意識の違いがあるにも関わらず、それに正面から取り組めない状態にあることが明らかになるケースが多い。

たとえば、跡取りである長男が特別であると公言して、他のきょうだいとは違う扱いをする祖父母に対して、子どもたちを同じように扱ってほしいと伝えてもなかなか理解してもらえないという話は、この地域の相談では多い。祖父母世代の“当然”と現代社会の一般的傾向とのギャップが解消されないままに残されている家庭が数多く存在する。このような祖父母の孫への関わり方は、両親世代だけでなく、特別扱いされる長男にも、孫として大事に扱われない他のきょうだいにも、またきょうだい関係にも、少なからず心理的な影響を与えている。

②個の主体性をめぐる世代間ギャップ

「自分が何をしたいのか、どう生きていきたいのか分からない」という主訴をもって来談してくる青年や成人のクライアントからは、幼い頃から家のために生きることを期待され、周りの望む通りに生きてきて、自分の人生を自分で選択するということをしてこなかったと語られることが多い。「親」より

も「家長である祖父」が強く、祖父の望むように生きてきたと語るクライアントが少なからずいることも、この地域の特徴であるように感じている。昔ながらの家のために生きるという価値観に多少違和感を持ちつつもそれに刃向うこともできずに成長し、いざ社会に出ようとしたときに躓くケースがあるようである。本来であれば、家長である祖父の昔ながらの意識や価値観と、個を尊重して生きるという現代の価値観とのずれを、親の世代が引き受け、取り組み、ぶつかっておくべきだったところを、孫の代が引き受けざるを得なくなっている家庭も多く存在する。

③祖父母世代が“発達障がい児”を理解することの困難

発達障がいの子どもの抱える母親の相談事例では、祖父母の世代の発達障がいに対する理解の難しさについて語られることが多い。特に、知的障がいを伴わず自閉的傾向のある発達障がいについて理解を得ることが難しく、母親の子育ての仕方が悪いのではないかと責められることが多い。

祖父母世代の発達障がい児の理解と受け入れは、特に母親の子どもへの関わりに大きく影響する。祖父母が障がいのある孫を受け入れられず母親を責めている場合、母親は自分が責められる原因となる子どもを、自分から遠ざけようとせざるを得なくなり、母子関係がより一層難しくなる。逆に祖父母が孫を可愛がってくれる様子を見て、自分と子どもとの関係を振り返る母親も多い。

また広汎性発達障がいの孫の理解が特に難しい祖父の事例では、祖父自身が広汎性発達障がい傾向をもっているケースも少なくない。母親も舅である祖父との関係の難しさに頭を抱えていたり、父親と祖父の関係が良くない場合も多い。祖父自身のコミュニケーションの難しさや独特のこだわりによって、孫との関係が難しく、孫の適応状態に好ましくない影響を及ぼしている事例もみられた。核家族の多い都市部では、父親にそうした傾向がみられ、父親と子どもの関係の難しさが話題にのぼることが多い。この地域の相談では父親及び祖父の世代にもその傾向があり、孫も含めた三者関係のなかでより一層難しい問題に発展しており、三世代同居が多いこの地域の特色と言えるかもしれない。

④母親の実家との同居について

祖父母世代との子育て観の違いが「地域親子関係構造」の一つの重要なテーマとなっている場合、かつては「嫁姑問題」がその代表的なものであった。現在でもそのことには変わりはないが、これに加えて、地域の相談事例からは母親の実家での同居の事例、すなわち母親にとっての実の母親と関係の問題も重要であると考えられた。場合によっては嫁姑問題より一層難しい問題が隠されている場

合も少なくない。

自分の実家に住んでいる母親の例では、不本意ながらに家を継いでいる事例、離婚を経験し経済的な理由からやむを得ず同居をしている事例、母親自身が親（祖父母）から自立できずにいる事例などがあった。そうした状況の中で、母親自身が抱えている「自分と親との関係」という課題に手がつけられていないままになっていることも多く、そのような場合、母親が祖父母（実の親）と適度な距離がとれず、過度に依存的になっていたり、逆に心理的距離が離れすぎているなどという状況が起こり得る。思春期の相談事例において、このような背景をもつケースがみられた。思春期になり、母親の生き方に何かしらの違和感をもち、そのことから自分と母親との関係や自分の生き方を考え始める子どもがいる。その際に三世同居という「地域親子関係構造」が子どもの心理的発達に及ぼす影響は大きいと考えられた。

⑤葛藤を「葛藤として」抱えきれない家庭

相談事例のなかには、三世同居をしてはいるが、祖父母世代と全く交流なく暮らしている家庭も数多く存在した。同じ家に暮らしていながら食事何もかも別という生活である。そこに存在するのに存在しないかのように振る舞う態度は、子どもに何らかの影響を与えているように感じられる。

都市部の核家族事例と比較して、この地域の三世同居家族の相談事例では、数多くの問題が直面化を避けたまま扱われずに放置されがちである。葛藤を葛藤として抱えないことの影響が、子どもに伝わっているように感じられる事例も多い。実際問題として、世代間の意識の違いの問題にぶつかり取り組んだ結果、別居することになった家庭も少なくない。時代背景からくる意識の違いを踏まえ、それぞれの世代が相互理解し合いながら生活することは、言葉で言うほど簡単なものではないのだろう。こうした世代間ギャップの存在が相互に意識化され、葛藤として直面化しながらそれでも一緒に居ることの苦しさを抱え続け、長い時間をかけてそれが乗り越えられて行く…そうしたことが三世同居家庭において実現されるならば、それが子どもの「不屈性」（自己回復力）の育ちにつながるのかもしれない。

しかし地域の実際の三世同居家庭においては、そうした直面化や葛藤の抱え合い、といった状態に至ることはむしろ少なく、問題や課題を明らかにしないまま、とりあえず形だけの同居を続けている家庭もかなりの数存在するのではないだろうか。そのような曖昧な状況が子どもの「脆弱性」となんらかの関連をもつものかもしれない。山陰という地域は、前近代と現代がまだまだ共存している地域であるようにも感じられる。それらが意

識化されないまま、葛藤として扱われることもなく、二重の意識として「地域親子関係構造」に潜在することが、この地域の臨床心理学的支援を構想する際のポイントになろう。

(3)「地域自己構造」の解析から

地域一親子の構造を受けた「自己」の問題として発生する「脆弱性」と「不屈性」（自己回復力）の両概念について、乳幼児の心的構造の中にどのように生成するのかについて、他の側面の発達との関係の中で検討した。①「親子関係の気になる様子」に関する調査から

200名の保育者を対象として「子どもについて気になる様子」と「親について気になる様子」の記述データを収集した。子どもについては、次のような臨床的分類（7カテゴリ、25サブカテゴリ）の有用性が確認された。

A. 攻撃性 (A1:他児への乱暴・易怒性 A2:他児への理由不明の乱暴・暴力 A3:自傷および自制困難 A4:残虐性・意地悪 A5:隠れた攻撃性) B. 多動性 (B1:多動・落ち着きがない B2:多動による集団不適応 B3:話が聞けない) C. 疎通感のなさ (C1:視線があわない C2:相互作用の困難 C3:自分の世界への固執) D. 自己表出の問題 (D1:人の顔色を気にする D2:自己表出の不全・自信のなさ D3:自己表出の屈折 D4:防衛的発言) E. 集団参加の困難 (E1:集団に入れない E2:一人遊び) F. 情緒の問題 (F1:甘え・スキンシップ F2:情緒不安定(泣く・表情が乏しい) F3:遊びこめない) G. その他 (G1:活動性 G2:食事 G3:遊び方 G4:親子関係 G5:自慰行為)

またこれらと関連する親の気になる様子には「過干渉」と「放置・無関心」の両極の問題が関連しており、こうした「心理的距離感」の背後には「身体的距離感」の問題があるのではないかと考えられた。

②「脆弱性—不屈性」尺度の試作に向けた研究について

「不屈性」概念は、困難な状況や思うようにならない事態、あるいは情緒的に不快な状況について耐えるという側面（耐性）と、そうした事態をひとまずやり過ごした後に、挫けずに立ち直る（自己回復力）という側面が含まれていた。本研究では、あらためて後者、すなわち「自己回復力 (resilience)」の概念を臨床心理学的に応用することから地域自己構造モデルが形成できるのではないかとの見通しを得て、臨床心理学的な立場から子どもに適用可能なレジリエンスに関する尺度を開発しようと試みた。

保育所における日常の場面でストレスを感じる場面や状況151を収集し、年齢別の頻度を考慮した上、年齢相応の適応的行動において適度な個人差がみられる場面や状況を抽出した。その結果、0-2才と3-5才で共

通に得られた分類として、A. いざこざの場面 B. 意思伝達場面 C. 対人的発話場面 D. 外部から行動が統制される場面 E. 食事場面 F. 保護者との分離場面 G. 新しい環境への適応を求められる場面 が得られた。

③親の側の「子どもとの距離感」について

親の子どもへの身体的接触に関する抵抗感が子どもの情緒的制御や resilience に関連しているとの仮説の下に、地域の親子関係構造が子どもの心理的問題（脆弱性）として身体化するに至るモデルを構築することをめざした。保育観察や保育士の記録から子どもの身体的「伝染性(contagion)」に関する29項目を抽出し、因子分析を行った結果、「大人がほめたりおだてたりすると、喜んで行動する」「保育者がほめるとその気になる」などの<対人態度>、「ごっこ遊びで役を取り、そのつもりになって行動することが上手にできる」「物語や絵本に影響を受けて遊ぶ」といった<象徴機能>、「みんなに人気があるものと同じものを、欲しがる」「人のしていることや遊びに影響されやすい」などの<同調性>、「人前で失敗した時、人目を気にする様子が見られる」「友だちのちょっとした言葉に傷つきやすい」などの<傷つきやすさ>など、多様な側面と関係していることが明らかになった。

以上の研究から、臨床心理学的地域支援においては「地域物語構造」「地域親子関係構造」「地域自己構造」の3つの構造を踏まえつつ進めていくことが重要であることが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

1. 三宅理子. 障害児難病児のきょうだいの会「スプーンの会」の活動の意義と課題, 島根大学教育臨床総合研究, 査読無, 第10号, 2011年(印刷中).
2. 三宅理子. 青年期の高機能広汎性発達障害児の親への支援, 島根大学教育学部心理臨床・教育相談室紀要査読無, 第6号, 1-10, 2011年.
3. 岩宮恵子. 心が折れやすい子どもたち一回復させる言葉とまなざし, 児童心理 (金子書房), 査読なし, 1月号, 34-41, 2011年.
4. 岩宮恵子. 『遠野物語』と心理療法—異世界につながる物語の力. 季刊東北学, 査読無, 東北文化研究センター, 23号, 93-102, 2010年.
5. 岩宮恵子. 挫折した子にかける言葉—茨の思春期を乗り越えるために, 児童心理 (金子書房), 査読なし, 1月号, 35-41, 2010年.

6. 肥後功一. 保育所における親子関係支援に関する基礎的研究 (1). 島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学), 査読無, 第43巻, 67-77, 2009年.

[学会発表] (計0件)

[図書] (計2件)

1. 岩宮恵子. 「フツの子」の思春期—心理療法の現場から—. 岩波書店, 2009年4月.
2. 岩宮恵子. 生きにくい子どもたち—カウンセリング日誌から—. 岩波文庫, 2009年3月.

[その他] (計2件)

- ・雑誌連載
 - 1. 岩宮恵子. 『遠野物語』と心理療法—異界と日常, ネットとリアル. 月刊新潮 (新潮社), 6月号, 2010年.
 - 2. 岩宮恵子. 今どきのシジュンキ. その1—その4, 子どもの心と学校臨床, 遠見書房, 第一号 (2009年8月号)—第四号 (2011年2月号).
- ・月刊誌掲載

6. 研究組織

(1) 研究代表者

肥後 功一 (HIGO KOICHI)
島根大学・教育学部・教授
研究者番号: 00183575

(2) 研究分担者

岩宮 恵子 (IWAMIYA KEIKO)
島根大学・教育学部・教授
研究者番号: 50335543
三宅 理子 (MIYAKE RIKO)
島根大学・教育学部・准教授
研究者番号: 20319833